

福井県におけるコナジラミ類の発生消長と種の構成

○萩原駿介・高岡誠一（福井県農業試験場）

福井県においては、2008年にトマト黄化葉巻病ならびに一部の薬剤に対して感受性の低いタバココナジラミバイオタイプQの発生が確認され、発生域の拡大に伴う被害の増加が懸念された。そこで今回は発生実態が明らかになっていない県内施設栽培に発生するコナジラミ類の年間を通じた発生消長と種の構成を明らかにした。

〈方法〉

1. 試験区の構成

- (1) ミディトマト半促成栽培施設（3月定植）間口6m、奥行50m（無加温）2棟、各4地点
- (2) ミディトマト抑制栽培施設（7月定植）間口15m、奥行50m（無加温）1棟、8地点
- (3) 野外 調査施設周辺の雑草地、4地点

※栽培品種 半促成栽培：華小町、抑制栽培：越のルビー

2. 調査方法

- (1) コナジラミ類発生量調査 調査期間2010年4月8日～2012年3月31日
各区の地上1.5mに黄色粘着板（25cm×10cm）を設置し、約7日間隔で回収し、実体顕微鏡下でコナジラミ類を計数した。
- (2) コナジラミ類の同定 調査期間2011年4月～2012年2月
施設内に発生するコナジラミ類を10頭採集し、外観およびLAMP法により種を同定した。
- (3) 冬期施設内外の気温の推移 調査期間2012年2月1日～2月29日
地上1.5mに小型防水データロガーを施設内、野外に各3箇所設置した。

〈結果の概要〉

1. 半促成栽培では5月中旬から誘殺が認められたが、発生量は野外、抑制栽培と比較すると少なかった。抑制栽培では8月中旬から誘殺がみられ、10月下旬～11月上旬に発生最盛期となった。冬期には誘殺数が0頭となったが施設内に残る雑草の葉裏にコナジラミ類の寄生が認められた。野外では9月下旬に発生最盛期を迎え、12月中旬に誘殺数が0頭となった。
2. 種の構成について発生初期の5月にはオンシツコナジラミ5頭、タバココナジラミバイオタイプB3頭、バイオタイプQ2頭であったが、秋～冬期にかけてバイオタイプQが優占した。
3. 2月の気温は抑制栽培施設内においては月平均気温が8.0℃、日中平均気温が11.7℃となり、施設内では10℃前後の気温が保持されていた。野外においては月平均気温が3.1℃、日中平均気温が4.4℃となり、5℃以下の気温が長期間続いた。
4. 以上のことから福井県においてはコナジラミ類の発生が急増するのは9月以降であり、2月には低温の影響により発生が大きく抑えられると考えられた。また、経時的に変化した種の構成については周辺環境や他作物における防除状況が影響した可能性が考えられた。